

令和2年度 第2回 くるめ支え合うプラン推進協議会 議事要旨 (別紙)
【重層的支援体制整備についてのワークショップ】

Aグループ

【相談支援】複合的な課題・制度の狭間の課題に対して

①相談する側は、どういう体制だと相談しやすいか。

- ・関係機関に相談があるときは、既に状況が深刻化していることがほとんどである。知らない人に相談はしにくいと思う。顔の見える関係が必要。
- ・行政等、関係機関につないで終わりではない。
- ・相談したくても、相談先を知らない人もいる。広報が大事 (今の広報紙は字が小さく、見ない)。
- ・「自分たちのことは、自分たちでどうにかしなきゃいけない」というわけではない。

②相談を受ける側は、どういう連携体制だと解決に向けて動きやすいか。

- ・子どもの分野については連携が難しい (学校や市の子ども関係の部署など)。学校によって相談対応の体制は様々。行政も相談内容によって、担当部署が縦割りである。
- ・対象者に関わるところが一体的に連携できればいい。

③自ら相談に来ることが難しい人や相談する気がない人に対して、誰がどのように関わることができるか。

- ・支援のルートを考えてみる。
- ・アプローチの方法を考えてみる。
- ・「これが出来ないから、支援は難しい」ではなく、色々な視点からの関わり方を考える。

④「参加支援」、「地域づくりに向けた支援」とどう連携するか。

- ・自分の校区では、月2回「元気リハ教室」を開催している。自治会に入っていない65歳以上の人も参加できるようにした。出欠をとらず、参加したいときに参加できる。
- ・出欠をとらないなど、ゆるいつながりがたくさんできればいい。
- ・若い世代であっても、子育て世帯であれば、地域の活動に積極的に参加してくれることも多い。子どもを通して地域活動を知ってもらい、参加してもらうことが大事。子どもたちをきっかけにした、地域づくりができればいい。

Bグループ

【参加支援】

- ①困りごとを抱えている人が、社会的なつながりをもつために必要なことは何か。
 - ・日頃のつながりが大事（自治会・民生委員・ふれあいの会など）。
 - ・老人クラブ活動の趣旨や目的（仲間づくり、いきがい、つながり等）を自治会へ周知する。

- ②困りごとを抱えている人は、どういう支援（居場所・住まい・就労等）があると良いか。
 - ・コミセンなどを活用した相談窓口の設置（自治会ごとだともっといい）。
 - ・協力雇用主を通して住まいや就労につなげる。協力雇用主も地域の力。
 - ・自治会や民生委員以外に相談できる人がいるといい。
 - ・子ども民生委員。

- ③それぞれの団体・施設等で何ができるか、どう連携して支援できるか。
 - ・ひきこもりの人などを把握している地域の人からつないでもらい、対応する。
 - ・不登校の子など読み書きできない子もいるので、寺子屋のような読み書きを教えられる場所があるといい。

- ④「相談支援」、「地域づくりに向けた支援」とどう連携するか。
 - ・自治会未加入者をどうするか。
 - ・各団体が何をしているかを知る。
 - ・各機関や団体の縦割りの解消と情報共有が必要。
 - ・自分の分野以外の情報を知っておく必要がある。

Cグループ

【参加支援】

- ①困りごとを抱えている人が、社会的なつながりをもつために必要なことは何か。
 - ・外に出るきっかけや機会。
 - ・関わってくれる人。
 - ・近所とのつながり。ゴミ出し・回覧板の時の声かけ。
 - ・状況や本来の困りごとなど、その人自身を知る。学ぶ。

- ・支援者が相手を困っている人と決めつけていないか？
- ・共に学ぶ場。
- ・制度も社会資源の一つであり、様々な情報を得られるようにする。
- ・本人が相談できる場。本人が困りごとを発信していけるようにする。

②困りごとを抱えている人は、どういう支援（居場所・住まい・就労等）があると良いか。

- ・本人に聞くことも大事。
- ・“人”としてつながれる場所（一人の人間として認められる）、環境（ピア・仲間）。
- ・事業所との連携。
- ・空き家の活用。
- ・コミュニティとの連携。住民の理解（受け入れる気持ち、環境）。
- ・保証人関係（制度として対応が必要）。
- ・居場所づくりのための助成。
- ・多様な人が集まれる場所（サロン等）を積極的につくる。→下記の※

③それぞれの団体・施設等で何ができるか、どう連携して支援できるか。

- ・相談を受ける体制をとり、関係機関につなぐ。
- ・本人たちから様々な情報（支援等を利用した人の経験や感想などを含む）を得る。
- ・選択肢を広げる。
- ・分野を超えた情報（他分野の事業やサービス、取組み等）を知る、学ぶ。

④「相談支援」、「地域づくりに向けた支援」とどう連携するか。

- ・住民の理解を得る。住民とともに学びを深める。
- ・使える資源を相談支援で活用。そのために相互の関係をつくっておく。
- ・自治会加入の有無によって、住みやすさが変わってくるため、ともに学ぶ場が必要。
- ・地域にある事業所、病院、施設、スーパーなどがつながれるような場があれば、地域づくりにつながる。
- ・居場所となる場にリーフレットやパンフレットを置く。

※地域に居場所があり、居場所で相談があれば、相談支援と情報共有を行う。

Dグループ

【地域づくりに向けた支援】

①困りごとを抱えている人は、どんな地域だと暮らしやすいか。

- ・自治区内でコミュニケーションが図れる。
 - ⇒ 自治委員に積極的にコミュニケーションを図ってもらう。
 - ⇒ 自治委員が回覧板を手渡しし、その時に声をかける。
- ・ゴミ捨て場は自然にコミュニケーションが取れる場になっている。
- ・顔の見える関係づくりが大切。

②世代や属性を超えて交流できる場や居場所を増やすにはどうしたら良いか。

- ・ゴミ捨て場での井戸端会議のようなものを増やす。
- ・校区の祭りは色んな人が集まる。
 - ⇒ 障害者は来ない。
 - ⇒ そもそも歓迎されているのか疑問。チラシに必要な方はお手伝いします等ユニバーサルな一面があれば行きやすい。事前の一工夫が必要。
 - ⇒ 地域側の「障害者は来ないのでは」という心のハードル(壁)もその要因。
- ・障害者の人が開くカフェは好評であった。
 - ⇒ 自然と集まれる(用があってそこに行く)のがいいのかも。

③住民が地域に主体的に関わりたくなるにはどうしたら良いか。

- ・自治会に加入してもらう。
- ・地域行事(もちつき等)でも仲間内でやっているようで壁を感じる。
 - ⇒ 祭りや地域行事などでも参加券の配布などがあると一般参加しやすい。
- ・子ども会に加入することで、親同士のつながりをつくる。
 - ⇒ 子ども食堂も効果的。
- ・あいさつをし、声かけのきっかけをつくる。
- ・地域を知る機会をつくる。

④「相談支援」、「参加支援」とどう連携するか。

- ・まちの保健室(多世代型地域包括支援センター)。
 - ⇒ 専門職もそこにおいて、相談があった場合、必要に応じて相談支援や参加支援につなぐ。
- ・人が集まる機会をつくる。
 - (例) 乳幼児用のおむつを捨てる専用のゴミ袋配布、高齢者へゴミ袋無料配布などを行い、そこに行く用事をつくる。人が自然に出会う機会になる。
 - ⇒ コミセンを土日も開けて、上記のようなことをやってもいいのではないか。